

いつもメルマガを読んでいただいております。おかげさまで、登録いただいている人数も増えて、700人以上の読者にお届けできるようになりました。ご来店いただいたお客様から、毎回楽しみにしていますという声もいただき、感想をいただくこともあります。

いつもは、音楽的に皆様の理解が深まり、ジャズをより楽しんでいただけるようにという思いで書いているのですが、難しいという声もいただくこともあるので、今回は音楽的解説をせずに、スタンダード曲の歌詞の込められた「固有名詞」から曲が作られた当時の時代背景に思いを馳せて楽しんでいただければと思います。

スタンダード曲の歌詞に固有名詞が含まれることは稀で、ほとんどは同じようなシチュエーションでもあり得る人間模様（主に恋愛関係）を普遍化した歌詞がついていますが、例外もあって、これがなかなか面白いのです。

◎社会現象になった恋愛相談役の名前を歌詞に

最初に、最近亡くなったドリス・デイの歌うBut Not For Meを聴いてください（名歌手でしたね、素晴らしい！）。26秒あたり（曲の中で前振りに当たるVerseの部分）で「ベアトリス・フェアファックス～」という人名が歌われています。さて、この人は架空か実在か？実在だとしたらどんな人だったのでしょうか？

<https://www.youtube.com/watch?v=1w60ugvxzrg>

この名前は、当時の新聞上で大変人気のあった人生相談コラムの回答者の名前です。ニューヨーク・イブニング・ジャーナルという新聞は、読者から要望のあった人生相談コラム「Dear Beatrice Fairfax（ベアトリス・フェアファックス様へ）」を1898年に始めました。ベアトリス～はペンネームで、実際の回答者は作家のマリー・マニングという女性でした。

これが大変な人気となり、新聞社のデスクの上に相談の手紙がうず高く積み上がり、そのうち部屋一杯になるほどにエスカレートしたので、郵便局は新聞社への配達を拒否し、新聞社は毎日郵便局に手紙を取りに行くポーターを雇うほどになりました。相談の中身は、ほとんどが若い女性からの恋愛相談だったようです。

今から考えると驚きですが、無声映画や曲まで作られるほどの社会現象にまでなりました。以下の画像は「BEATRICE FAIRFAX TELL ME WHAT TO DO」という曲が1915年にリリースされた時のポスターです。1915年といえば大正4年ですから、当時の米国で現代にも通じるこんなセンス、デザインのポスターが作られていたのにはちょっと驚きますね。

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/beatricefairfax.jpg>

さて、But Not For Meは1930年に劇場公開されたブロードウェイミュージカル「Girl Crazy」のために作られました。作曲はジョージ・ガーシュイン、作詞はジョージの兄のアイラです。マニングは1905年頃に相談コーナーを辞めていたようですが、その後もアメリカの新聞で恋愛相談は盛んだったようで、その名前は依然として有名でした。このため、1930年にアイラが歌詞を作る際もBeatrice Fairfaxを引き合いに出したのです。

歌詞の意味は、ある男性に恋をしたけれどももう脈はないと分かっている女性の立場で、書かれています。「ベアトリス・フェアファックスさん、彼が私のこと今でも気にかけてるなんて、言わないでよ」という歌詞がVerseで歌われ、それからコーラスで「They're writing songs of love, but not for me.」と始まります。たくさん恋の歌は作られるけど、それは私のためじゃない。というわけです。もう彼のことは諦めているつもりなんだけどまだどこかで気持ちが残っているという女性心理を歌っています。

ネットでBut Not For Meの歌詞を調べるとコーラスから始まる歌詞しか載っていないことが多く、当然そちらにはベアトリスさんの名前は出てきません。ここではVerseの歌詞だけ載せておきます。

(Verse)

Old man sunshine listen you! Never tell me, "Dreams come true!

Just try it and I'll start a riot.  
Beatrice Fairfax, don't you dare ever tell me he will care;  
I'm certain it's the final curtain, I never want to hear from any cheerful  
Pollyannas, who tell you fate, supplies a mate; it's all bananas!

◎同業者を揶揄？

次はThe Lady Is A Trampというスタンダードの歌詞（やはりVerse部分）に出てくる Noel Cowardという人物です。エラ・フィッツジェラルドの「The Lady Is A Tramp」をはじめ、ほとんどの音源ではVerseから歌っていますから、ああこの部分聴いたことがあるという人も多いと思います。歌詞の中でNoel Ca'adと書かれている部分、これはNoel Cowardの略称（愛称？）だったようです。

ノエル・カワード(1899-1973)という名前は日本ではほとんど知られていませんが、イギリス、アメリカのショービジネス界では知らぬ者のないほどの有名人だったようです。脚本、作詞作曲、演出、映画監督など幅広い分野で活躍した今でいえばマルチタレントです。作風は、軽く、おしゃれで都会的センスに満ちた、別の表現をすれば表層的な世界を描くことで、階級社会が形成されていたアメリカでも、いわゆるハイツ、セレブ的な人たちから圧倒的に支持されていたようです。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%AB%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%83%89>

この曲は、1937年の舞台ミュージカル「Babes in Arms」のために、リチャード・ロジャース（作曲）、ロレンツ・ハートのコンビが書いた名曲です。歌詞の内容は、ジャジャ馬的キャラクターの女性が当時の上流階級の様相を嘲笑するというものです。そのハイツ世界の象徴が「ノエル・カワードを称賛するようなパーティ」で、「私はそんなところに絶対行かないわ」という歌詞をハートは書きました。

1937年当時、カワードは存命でしたから、同じショービジネスに身を置く大物を、歌詞の中で実名で揶揄するというのは、結構思い切った行為だったような気はします。ハートはカワードがよほど嫌いだったんでしょうね。ひょっとすると嫉妬もあったのかもしれない。

ここで揶揄の対象となっている上流階級のカルチャーは以下のようなものです。

- ・劇場にわざと遅れていく
- ・ディナーは8時前には始めない
- ・ハーレムに着飾って行く
- ・拍手ゲーム（内容は不明）

人種差別は別として、自分は何となくアメリカという国はイギリスと違って階級社会ではないというイメージを以前は持っていました。しかし、ヨーロッパにおけるように家柄で決まるような階級ではないのですが、階層は厳然としてあることがスタンダードの研究をするうちに分かってきました。大変な努力をして上昇することはもちろんできるのですが、まず有名大学に行く時点でかなりの経済力が要求されるので、上がっていくのは非常に険しいようです。

ミュージカルは、ネットで調べた限り共産主義的なテイストも入ったわりと粗雑なストーリーのようですが、上記のような社会構造を背景として、歌詞が揶揄しているような上流階層のスノッブ的な文化があり、それをジャジャ馬的な育ちの女性が馬鹿にする、という構図がこの曲の背景にはあります。

ただし、スタンダードの成立にはよくあるパターンですが、ミュージカル自体の出来と関係なく、素晴らしい挿入歌だけが独り歩きし、楽曲として楽しまれるようになっていきました。曲は本当によくできていて、エラの歌唱はすでに伝説と化しているでしょうね。今でもヴォーカリストはよく歌います。

歌唱（エラ）：<https://www.youtube.com/watch?v=TQkIccS-W4U>

歌詞：<http://www.lorenzhart.org/trampsnng.htm>

いかがでしたでしょうか？書かれた当時の社会や文化が時にスパイスのように散りばめられているのが、スタンダード曲の歌詞の魅力の一つでもあると思います。こうした背景を知って聴くのも一興ではないでしょうか？

以上